



石井 正三氏

今年はヨーロッパでも四〇度  
に達する高温が到来し、気象  
変動に脅かされている。

日本の公共事業は、明治維  
新以降、百年間の気象条件を  
踏まえ、治山治水計画が立案  
されることになっている。と  
ころが最近では、その予測を超  
えた振幅を示し、大きな被  
害を巻き起こしている。これ  
では、千年レベルの災害想定  
に対応する必要があるという  
意見も出る。

### 千年以上の振幅

野山にたつぷり水が入る  
と、緑が目立って深くなる。  
当たり前の日本の初夏の風景  
がどれ位凄（す）いことなのか、改  
めて考えている。ユーラシア  
やアフリカ大陸では砂漠化が  
進行、枯れた川は戻らず、樹  
木も立ち枯れ、人々の暮らし  
も成り立たなくなる。

東日本大震災と同等の地  
震・津波被害は、八六九年の  
貞観地震・津波と重なる。福  
島原発事故前に、東京電力社  
内で対応力をここまで上げる  
かどうか討議され、そこまで  
は不要とされたらしい。  
日本医師会常任理事当時、

## 千葉県の地層標準に

### 世界は関連して事象が展開

国際関係と救急災害などを担  
当した。二〇〇六年、国際シ  
ンポジウムを東京で主催、米  
国の演者から医師の今後のあ  
り方、東大地震研究所から今  
後の地震災害について、日本  
医大山本保博教授に二〇〇四  
年、スマトラ沖地震での医療  
協力実践などの講演をお願い  
した。

安定した時代だったと地球史  
全体ではなるのかもしれない。  
若い頃、日本に旧石器時代  
はないと習ったが、今では遺  
跡がたくさん見つかったとい  
る。そこから縄文・弥生・古  
墳時代と続いたことを、古事  
記や日本書紀で読むことがで  
きる。万葉仮名で書かれた古  
事記は、若い時から愛読書。  
漢文調の日本書紀とは微妙に  
違いながら、神話の時代から  
王朝の時代への移行期が綴ら  
れている。

### 知見の原典、万葉集

最近では、ホツマツタエなど、  
漢字伝来以前の書と言われる  
文献関連の本をいくつか読ん  
でいる。未だ、歴史学者から  
認知されていないようだが、  
古代文字・五七調のウタのか  
たちで記述されている。

古墳などお墓を発掘して出  
土品をアレコレと判定するだ  
けでは、古代人の心の動きに  
までなかなか思いが届かなか  
い。

地球は、何度かの全球凍結  
など氷河時代と温暖化時代の  
気候変動を交互に経験してい  
るといわれる。最近、千葉県  
の地層が世界の標準「チバニ  
アン」として認定された地軸  
の大逆転もあった。

二〇一一年、東日本大震災  
に見舞われるまで、良好な気  
候や自然条件がたまたま続く

各地の神社に物的な確証も



未曾有の災害となった2011年3・11の東日本大震災。いわきの浜通りでも大津波によって家屋の流失、倒壊、さらに多くの人が犠牲となった

出てきているようだし、太古からひとすじに繋がっている、世界でも稀なクニとして日本に、これからも従来の一般論を上書きする色々な知見が出てくる可能性はあるだろう。

古今和歌集や新古今和歌集

では、読み手の真情よりも定番になった故事や作品を引用する、本歌取りの技巧を前面に出している。

原典となるのが万葉集だ。精神安定作用が気持ち良く、仕事の合間に解説つきで頭から尻尾まで二回読んだ。民衆から読み人知らず、そして多くの貴人に交じって天皇陛下の御製まである。今後の展開を楽しみに待ちたい。

一九六〇年から七〇年代に青春を送った団塊の世代。私はその尻尾の世代という位置

付けだ。戦後のどさくさ、お祭りには手足を失くした傷痍軍人が街角に立ち、いくばくかのお金を頂いていた。メーソンの通りを曲がると未だ舗装されず、雨上がりの学校帰りには水溜まりをケンケンで避けて帰ったものだ。

一九六一年に国民皆保険制度が成立後、仕事に励むモーター社員に弾みがつき、駄菓子屋の五十銭のあめ玉がなくなり、紙芝居も来なくなつて高度成長期を迎えた。

## GSが全盛時代に

この頃、プレスリーなどロックスターからビートルズなどグループサウンズ全盛時代になる。

一九六六年、ビートルズ来日公演の頃は、地方の尖ったファンはそれだけで「不良」と見なされたから、とても東京に行ける雰囲気ではない。「電気紙芝居」と呼ばれたテレビを一番前で眺め、女の子たちの歓声の向こうから聞こえる彼らの演奏に聞き入ったものだ。

ビートルズがインドに傾倒

してヒッピーたちが世界中に溢れた頃、東京芸大の小泉文夫教授がヒッピーファッションで世界の民族音楽を語るFMラジオ番組を持っていた。その中のウンチク、馬子唄の話は今でも記憶に残る。

騎馬民族がコーカサス地方から中央アジア一帯を闊歩するときにはリズムを効かせ、明瞭に区切ったシラブル調の音楽。馬を世話するときは、息つきいっぱい旋律を伸ばしてコブシを利かせたメリスマ唱法が特徴。西にハンガリーの騎馬民族音楽、東では日本の追分節になる。

それぞれ微妙に違いがあつて信州で小諸追分、東北で南部追分、そして北海道の江刺追分が代表的な三大追分と言われた。

馬は、戦のときは戦車、平時は自動車、農耕では田畑を耕す機械代わりになつて重宝。その馬を世話する人たちが馬と一緒に移動するからメロデーも動き、ハンガリーやその周辺では前半が朗詠調、後半に激しいリズムミカルな音楽が続くスタイルが残っている。

興味がある方はドップラー作曲フルートとピアノのためのハンガリー幻想曲を聞かれると、古代の人々の交流の歴史を実感できる。

小名浜からマエストロ小林研一郎がハンガリーに渡り指揮者として活躍し、私も小名浜に生まれ、そのハンガリーに留学したのは不思議な縁だ。ハンガリーには同業でウチと同じく共稼ぎのイエヌ・ユーローヴ教授がいて、四十年以上の付き合い、国の違う親戚と言いつついる。

地上世界は関連しつつ、事象が展開している。

## 筆者プロフィール

石井 正三

(いしい・まさみ)

地域医療連携推進法人医療戦略研究所所長・代表理事、ハーバード公衆衛生大学院名誉武見フェロー、東日本国際大学健康社会戦略研究所所長・客員教授、医療法人社団正風会理事長

